

七尾へ連れてこられた中国人 (小学校高学年～中学校)



日本の敗戦後の一九四五年九月に
七尾の宿舎で写された写真
前列右から3人目が馬得志さん

馬得志さんの話

わたしは1944年には、山東省で小学校の先生をしていました。そのころ、日本軍が中国を侵略していました。中国人は日本軍の侵略に反対しました。日本の軍隊は反対する中国人を捕まえて、ろうやに入れました。私の学校も日本軍の兵隊に囲まれて、先生はみんな捕まえられました。ろうやに入れられて日本軍の兵隊になぐられたり、水をかけられたり、ひどいごうもんを受けました。

ろうやから收容所へ移された後、中国の港から貨物船に乗せられ日本の下関に着きました。貨物列車で七尾へ連れてこられ、港近くの大部屋(前は倉庫だった建物)に入れられました。1944年11月のことです。それから1年間、七尾で苦しい生活をさせられました。

- (1) 仕事...船で七尾港へ運ばれてきた荷物のかついで陸へあげたり、倉庫へ運んだり、貨車に積んだりする仕事をしました。70kgを越える荷物のかつぐのはたいへんでした。朝早くから夜おそくまで、1日に12時間～14時間も働かされました。仕事がかげびしいのに食べ物あまりあたりませんでした。そのため、体が弱って歩く力もないくらいでした。
- (2) 食べ物...黒いむしパンが1日に6個(朝昼夜2個ずつ)だけでした。たまに野菜やワカメのみそ汁が出ました。栄養不足で目が見えなくなったり、皮膚病になったり、多くの病人が出ました。病気になっても医者にみてもらえず、死者が15人、失明者が64人も出ました。
- (3) 住んでいた所...たて11m、横36m(約教室5個分)の大部屋に399人がつめこまれました。ふとんもないので、わらでござのようなものを作りました。敗戦まではふるには1回も入れませんでした。
- (4) 服そう...仕事をする時の服はもらえず、中国から着てきた服だけで、着がえもありませんでした。くつもないので、わらではきものをつくりました。
- (5) 給料...長い時間働かされたのに、給料はぜんぜんもらっていません。
- (6) 思っていること...戦争中に日本は中国から多くの人たちをむりやり日本へ連れてきて、食べ物も満足に与えないで、牛や馬のようにこき使って働かせました。中国人にこんなにひどいことをしたのに、日本はわたしたちにあやまっていません。わたしは七尾へ連れてこられたことは忘れません。これから日本は中国とずうっと仲良くしてほしいと思います。

中国人と交流した近藤栄次郎さん

近藤幹子さんの家には中国人の写真が残されています。七尾へ強制連行された中国人の一人が帰国する前に置いていったものです。幹子さんのお父さんの栄次郎さんは、七尾港の近くで理髪店をしていました。日本の敗戦後、外出するようになった中国人がそこへ出入りしていました。小学生だった幹子さんは、中国人に行水(たらいに水やお湯を入れ体を洗うこと)をさせるためのお湯をわかしていたので、中国人から親しみをこめて「カンゾー」(幹子の中国語の発音)と呼ばれていました。その頃は、風呂にも入れず皮膚病や眼の病気にかかった中国人が出入りするのをいやがるのが普通でしたが、栄次郎さんは中国人に心を開き、行水をさせたり、話し相手になったり、帰りが遅くなった中国人を宿舎まで送ったりしました。幹子さんは中国人が言っていた「リャンコ、リュウタ」(中国語で「二人で散歩しましょう」)、栄次郎さんが言っていた「ミンテンライライ」(中国語で「明日またおいで」)などの言葉を、60年以上たった今もはっきりと覚えています。中国語を知らなかった栄次郎さんは、店へ来た中国人と交流しながら中国語を理解するようになったそうです。中国人は栄次郎さんを「大人」と呼んでいました。

中国人を差別するのが当たり前だった当時、七尾にも中国人と人間的な交流をした人がいたので

す。

中国人を弔った大乘寺の住職さん

中国人が死亡すると港の近くの大乗寺でお経をあげた後、火葬されました。遺骨は宿舎に置かれていましたが、死亡者が増えてくると大乘寺に預かってもらいました。日本の敗戦後、中国人が七尾を離れる時に15人の遺骨が持ち帰られました。その後も、大乘寺に死亡した中国人の名前を書いた位牌が置かれ、供養(お参り)が続けられています。

日本各地では、死亡した中国人を地面に放りっぱなしにしたり、穴を掘って放り込んだりしていたところもありました。しかし、七尾では心あるお坊さんが死亡した中国人にお経をあげていたのです。寺の門徒の人たちから「中国人になぜそんなにていねいにお参りするのか」と言われると、当時の大乘寺の住職さんは「仏(死んだ人)に中国人も朝鮮人もない。みんな人間だ」と言って、中国人の遺体を前にしてお経をあげていました。住職さんのこうした思いを受けつぐために、七尾では死亡した15人を慰霊する「一衣帯水」碑が1977年8月15日に建てられました。

戦後日本では・・・

「日本国憲法」により「平和国家」「民主主義国家」として生まれ変わりました。その後、中国とは「日中平和友好条約」が結ばれるなど、新しい関係を築いています。

七尾の能登食祭市場から七尾港(矢田新埠頭)へ向かう海岸道路のそばに「一衣帯水」と刻まれた石碑が建てられています。「日中友好碑」と呼ばれるこの碑の前で、毎年8月15日に追悼法要(お参り)が続けられています。

この碑の表の面には、「日本と中国は狭い海(日本海)をはさむ一衣帯水の隣の国である。両国には過去に喜びと悲しみがあつた。これからは永遠に仲よくしましょう」と訴えています。この漢詩のいう喜びとは何でしょうか。また、悲しみとは何でしょうか。考えてみましょう。

「一衣帯水」(いちいたいすい)...一筋の帯を引いたようなせまい水の流れや海峡。また、そのような水を間にして向かい合っていること。

◎ 日本はなぜ、戦争を始めたのでしょうか・・・

明治に入り、日本はヨーロッパの国々やアメリカのような豊かな国を目ざしました。そのために朝鮮を支配しようと考え、中国(1894年：日清戦争)・ロシア(1904年：日露戦争)と戦い勝利し朝鮮を植民地にしました(1910年：韓国併合)。しかし、日本の支配に対して朝鮮の人たちが激しい抵抗を行い、日本は多くの朝鮮の人々の命を奪いました。また、この間、中国から台湾を奪い植民地(1895年)にするなど、中国への侵略もすすめていました。さらに、朝鮮を足がかりに、中国の東北部(満州)を独占しようとして戦いをはじめ(1931年：満州事変)、1937年の盧溝橋事件以後、中国との全面戦争(日中戦争・15年戦争)になりました。

日本は石油などの資源が非常に少ない島国であり、外国からの輸入にたよっていましたが、日中戦争が始まると、輸入しづらくなってきました。また、日本国内では、若い男の人が次々と戦場へ行かされたため、働く人が減り、国民の生活は苦しくなってきましたが、日本は、「お国(天皇)のために命をささげる」教育を行い、戦争を賛美する世論が作られ、戦争に反対する声はすべておさえこまれました。

日本は、日中戦争を続けるため、南方諸国(フィリピン・インドネシア・タイ・ベトナム・マレーシアなど)に進出し、石油などの資源や食料を確保しようとしたため、アメリカ・イギリスなどに対立し、戦争をはじめました(1941年：アジア太平洋戦争)。国内では、資源や働く人の不足を補うために「こっかそうどういんほう国家総動員法」により、それぞれの家の鍋や釜まで国が集めたり、旧制の中学校や女学校の生徒(今の高校生)、女性、お年寄りまでもが、武器を作ったり武器を作る原料や食料を運んだりする仕事をするようになりました。しかし、それでも働く人が足りず、朝鮮や中国から無理やり日本へ連れてこられた人もいました。当時、日本にいた中国人は約4万人にもなり、全国135ヶ所の鉱山・炭鉱・港などへ送られむりやり働かされました。厳しい労働と栄養不足、病氣、ぎやくたい虐待のために、そのうちの約7,000人が死亡しました。

日本がはじめた戦争は、1945年8月15日に日本が降伏して終わりました。みなさんは、この戦争で、アメリカ軍による空襲・原子爆弾などのため多くの日本人の命が奪われたことを知っているでしょう。しかし、日本軍もたくさんのアジアの人たちの命を奪ったことも知っておいてください。戦争とは、人間が人間の心をなくしてしまう、とてもおそろしいものなのです。

◎敗戦直後の七尾では・・・

七尾へ連れてこられた中国人は、宿舎と仕事場の港の間を監視されて往復するだけで、外出の自由がなかったため、七尾の人たちが中国人を目にすることはほとんどありませんでした。

日本が戦争に敗れた後、七尾へ連れてこられた中国人たちは、自由に外出できるようになりました。しかし、当時の七尾の人たちは、日本人ではない人たちに対する差別意識が強く、風呂にも入れず病気が多かった中国人とのかかわりを持つことをいやがりました。また、中国人と七尾の人の間にトラブルも起きていました。

授業案

(1) ねらい

- ・15年戦争中、日本は中国人を七尾へ強制連行し過酷な労働を強いてきた事実を知る。
- ・その中で人間としての良心を貫き通した人がいたことを知る。
- ・真の友好関係を築くにはどうしたらよいかを考える。

(2) 展開例

学習活動	児童・生徒の意識や活動の流れ	支援
1. 集合写真を見る。	これは何の写真だろう？ みんな丸坊主だ。 名前からすると中国人かな。	1945年9月に七尾で撮影されたものであることを補足する。
2. 『馬得志さんの話』を読む。	なぜ無理矢理日本に連れてこられたのだろう？ どんな生活をしていたのだろう？	事実を正確につかませる。
3. 説明部分を読み、時代背景を知る。	説明部分を読み、時代背景に気がつく。 戦争中の労働力不足をカバーするために強制連行が行われたんだ。	当時の日本の状況（軍国主義）をおさえる。
4. 近藤栄次郎さんと大乘寺の住職さんのことを知る。	親切な人がいてよかった。 この人たちは同じ人間として平等に関わっているぞ。	そうした温かさに触れた中国の人たちの思いを想像させる。
5. 二度とこうした悲劇が起きないよう、だれがどんな活動をしているか考える。	「一衣帯水」の碑を建てたこともそうかもしれないよ。 馬さんは何か行動を起こしていないかな。 七尾でもいるかもしれないよ。	憲法の平和主義について知る。
6. 感想を書いたり交流したりする。		

- * 3と5で、DVD『七尾強制連行60年目の提訴』やビデオ『七尾への強制連行・第二次調査』を見ると、より具体的にイメージできる。（どちらも支部書記局にある）
- * 馬さんたちを原告とし支援する会がサポートする形で、謝罪と賠償を求める裁判が現在も進行中であることを説明する。

地域教材の調査のしかた（先生方へ）

①具体物（石碑や墓、建造物）をさがす、②地元の人（近くの人やお寺の人）に尋ねる、③体験者の話を聞く、④図書館の本を調べる、⑤博物館・資料館で調べる、⑥当時の新聞記事をさがす、⑦全国の運動との交流を通して資料を得る、などの調べ方が考えられます。

七尾への中国人強制連行の調査の場合

①港や宿舎近くの人から話を聞く、②中国人と同じ港の埠頭で仕事をした旧制中学校の生徒だった人たちから話を聞く、③新聞記事をさがす（日本の敗戦後の要求闘争に関して）、④外務省外交史料館や国会図書館などで国の文書（外務省報告書や事業場報告書など）をさがす（私たちが応援した国会議員を通じて資料をとってもらう）、⑤全国の市民運動などとの交流から中国側や日本側の研究者、市民運動をしている人たちなどを知り交流する、などを繰り返し、七尾における調査から始まり、訪中して生存者に会って聞き取り調査や交流をすることで広がりました。